

第28回全国手話通訳問題研究会討論集会 in 栃木

第6分科会 「手話」

報 告 書

神奈川手話通訳問題研究会会員

清 水 八 千 代

- I 実施日時 2012年2月11日(土)・12日(日)
- II 参加者 第6分科会 合計 75名
 神奈川県手話通訳問題研究会 会員 6名
 神奈川県聴覚障害者連盟 会員 1名
- III 司会 村石 彰 (全通研理事)・中村 岩子 (全通研理事)
 共同研究者 財団法人 全日本ろうあ連盟議長 倉野直紀氏
- IV 討論の柱 1. 地域で使われている手話の収集・整理と保存の取り組みについて
 2. 分野別の手話の整理や創作の取り組みについて
 3. 標準手話と地域の手話の関係および標準手話の普及について
- V 活動報告 —2012年2月11日—
 1. 神奈川県手話通訳問題研究会
 2. 全通研和歌山支部
 —2012年2月12日—
 3. 栃木県手話通訳問題研究会
 4. 全通研京都支部
- VI 報告発表

◆【平成23年度活動報告】 ～神奈川県手話通訳問題研究会会員 木村氏

・地域手話に関わる学習会を定期的開催・実施報告

・7月31日 横浜ラポールにて神奈川県手話通訳問題研究会集会報告

集会にて「ろう学校アラカルト・教科バージョン」として、10人のろう者に学校で使っていた教科に関する手話を表現していただいた分科会の様子をDVDにて紹介。

討論集会では、北海道・青森・宮城・栃木・静岡・愛知・京都のろう者が出身校の教科を手話表現した。地域や世代によって表現方法は違っていたが、愛知や京都の手話は分りにくかった。例えば「国語」、京都は「改める」を表現、愛知は「斉藤」と表す。「算数」は両県とも数を数える様子でしょうか・・・両手を同時に握ったり開いたりする。しかし、全体的に「写像的」であり初めて見ても分かる手話が多かったが珍しい手話表現に盛り上がる場面もあった。

また、教科の他「寄宿舎」や「寮」についても表して頂いた。京都では両手平で左右のこめかみで髪をはらう様子を表していた。宮城県・和歌山のろう者より、「寄宿舎」と「寮」の違いは費用が関係するのではないかと話された。例えば「寄宿舎」は費用支払うが「寮」は補助金によって寮に入り生活をするのだそうだ。また、どこの地域にも「寄宿舎」と「寮」が整備されていたわけではなく、「寮」がある地域は少なかったようである。

- ・3月11日 東日本大震災時の様子を数人のろう者が手話で語り DVDにて紹介。

◆【第28回近畿手話通訳問題研究集会「手話」分科会からの報告】

～第28回近通研集会「手話」分科会代表 服部氏

- ・イメージソング『京都物語』を紹介。
この『京都物語』は歓迎の歌であり、力・気持ちを込めて歌う
- ・「色」の手話表現方法について紹介
- ・「介護に使う言葉の手話について」参加者とともに表現

塗り薬の手話、「おかゆ」（米/柔らかい）や「おもゆ」（米/湯）について手話を確認しあう。

しかし、地域に関わらず介護者によって手話が違う。何とか、相手に伝わるよう工夫されるようだ。

「介護」で使われる言葉は専門的であり、難しい言葉が多い。例えば「浣腸」「敵便」「とろみ」「褥瘡」「嚥下」「誤嚥」など介護に携っていないならば、意味をつかむことができないので手話表出も

難しい。

高齢者にも伝わる手話、職員同士の手話などコミュニケーション方法を確立することが大切であるとまとめた。そして、「介護に関わる手話単語」の本を出版してほしいとの要望があった。

- ・ その他手話単語

「魚」・「花」・「宇治市」・「コンビニ」・「ファミリーレストラン」等参加者とともに確認しあう。

特に印象的だったのは「ローソン」の手話に「聾」/「損」と表すのではなく「聾」/「尊重」と表した方が良いとの発言に全員がうなずいていた。

- ・ 「はやい」の手話単語について

「早い」・「速い」・「スピード」について、意味や手話表現の違いの説明。

◆【世代別による手話の比較】 ～栃木県手話通訳問題研究会 森氏

- ・ 東日本大震災体験談を「世代別」に収録

20代～40代は「指文字」や「口型」を多く使い日本語のリズムになっている。50代～60代は視線や間をとり、繰り返し表現され途中に「指文字」や「口型」が入る。70代～80代になると、全身を使い「身振り」・「手振り」登場人物と会話したり「写像性」がとても豊かに表現されている。また、「同時法」や「パツ」「ポツ」など日本語とは違う言葉も表現される。今回の報告のための収録であったため、今後データを取り続けることが大切であるとの見解である。

- ・ 東日本大震災被災者である3県（福島・宮城・岩手）他青森のろう者にその当時について発表していただく。

福島においては「会津」「福島市」「浜通り」在住のろう者にそれぞれ体験談を話して頂いた。山に近い地域と海岸に近い「浜通り」とは被害の大きさが違っていたようである。浜通り在住のろ

う者は地震発生時仕事中だった。机の下に隠れるが声が出せない、手話が見えないため他の職員とのコミュニケーションが取れずとても不安だった。勤務中、携帯電話はロッカーの中にしまっていたため、何が起こったのか情報が無かった。

青森県陸奥湾に近い地域では「大津波注意報」が発せられた。山越に在住しているろう者は、一人暮らしの高齢の方が心配で様子を見に行ったが鍵がかかり開かなかった。こんな経験から災害時は鍵をかけては逃げ遅れることが分かった。

青森市に在住の方は、子どもが家の鍵を持っていくのを忘れた為、自分だけ避難できず家で息子の帰りを待った。停電のためTVもつかず地震の情報もなかったが「ワンセグ」で何とか地震情報を得たとの話をした。

宮城県中新田在住のろう者は当時は震度7と大きな揺れであった。しかし、東日本大震災後の繰り返される余震や4月7日の強い余震にも怯えた。仕事で止めたが自宅に帰る方法を考え悩んだ末バスで帰った。

このような体験から各地で避難支援ガイドラインの確立や、地域での安否確認、訪問、ネットワーク、マスコミやTVで避難の呼び掛けなど対策に取り組んでいる。

◆【昔から使われているろう者の手話を大切にしたい】

～京都府山城手話の広場 服部氏

・ニュアンスの違う日本語文章

「パ」「ポ」や「パンパン」など日本語ではない手話表出時の口型について、短文を例に説明。また、どのような時にこのような言葉になるか意見を収集した。

「パッ」…無理・出来ない

「プッ」…飽きる

「ベン」…くだらない・つまらない

「ポッ」…なんで?たりない

「パンパン」…うそ!まさか!

そして、例題を提供された参加者全員で「余計」・「言語道断」・「いい加減」など意味の違う短文の中で適切な手話を選択し工夫した。

VII 問題提起

- ① 世代別・地域別・男女別の手話表出の分析と保存
- ② 高齢者の手話、日本手話の保存
- ③ 高齢化社会に伴い、介護に関わる専門用語の統一
- ④ ③を含め、「新しい手話」の発展
- ⑤ 被災時の情報保障について

VIII 感想

以前、砂田アトムさんの舞台を拝見しました。その内容は健聴の警察官役であるアトムさんがろう者である犯人を取り調べる場面。取り調べをするが言葉が通じない。そこで彼は手話を学ぶことにした。サークルで入門・中級・上級で手話を学ぶ。しかし通じない。次に世代別の手話を学びそれでも通じない。そして全国の手話を学び方言も覚えた。最後のおちはアトムさんが取り調べられるほうであり、警察官は弟だったという内容です。

今回初めての全国手話通訳問題研究討論集会に参加しました。実は初めは分科会もどこに参加したら良いのやら・・・不安でしたが、たくさんのろう者の手話を見る事が出来るとの話を伺い、第6分科会「手話」を選びました。

実際、全国のろう者が多く参加されておりびっくりしました。また、積極的に発言、質問や意見が飛び交う中私は一言も発することが出来ず必死で手話を読み取っていましたが、司会者の援助により初めてでも内容を理解することができました。

さて、討論会では4団体の報告発表、全国のろう者の方々の発表をととても興味深く勉強させていただきました。世代によって表出の違いは健聴者もろう者も同じ、変わりつつある時代の手話表出保存の重要性を感じました。報告の中で、収録の後にお亡くなりになられた高齢の方がいらっしゃると伺いととてもショックでした。

しかし、収録によって魅力的なそして貴重な手話を保存することが出来たことはとても良かったと思います。

高齢者による手話の保存もとても大切なことではありますが、同時に高齢化社会に伴う「介護」に関する手話もとても重要であると感じました。今後は介護に就く「聴覚障害者」も増えてくることでしょう。その時に「介護に関わる手話」の統一、相手に伝

わる手話が必要となります。介護は押し付けではありません。本人の意思を尊重しながら出来ない部分をお手伝いさせて頂く上で「意思疎通」は大切なコミュニケーションです。手話の歴史の保存と同時に迫りくる高齢化社会に対応できる新しい手話への取り組みを進めて行かねばなりません。

今後も学習会に参加し、魅力ある手話に触れて行きたいと思います。そして、高齢者が表現する魅力ある手話の保存や標準手話の普及など一緒に取り組みたいと思います。

最後に砂田アトムさんの演劇にはとても深い意味があったことを討論集会に参加し気がつきました。